

令和5年度 ふるさと学習まとめ

A班

服装

- 農民や職人は、普通半袖の、腰まで短い上着に腰みのや、はばきをつけ、わらじをはいていた。
- 袴は、必要に応じて膝の下でくられました。そして、上着と袴を合わせて直垂といい、室町時代の後半になると、直垂は、狩衣・水干に代わって儀礼服となり、直垂の下に着ていた小袖が染色されて、普段着になった。
- “たまがき書状“に書かれている三品（小袖・布子・紬）のうち、布子は、小袖の裏側に麻や木綿の布をつけた衾のことで、中に綿を入れた防寒用のものもあった。また、紬は、真綿を紡いで織った絹の布で、これら三品は、その頃代官階級の普段着と言える。



食事

一般的にお粥を食べていた。(水分の多い今でいう雑炊のようなもの)今と違って昔は味が薄かった。濃い味にする調味料はなかった。あわやひえなどにわらびぜんまいなどのさんさい、あるいは狩でとらえた猪や、山鳥、川でとった魚などを添えて食べていた。中央の武士は朝と夕方の二回食事をとっていた。主食は玄米でおかずは農民とかわらないものを取っていた。



住まい

- 農民は川沿いや谷間の低い土地に家を建てて住んでいた。
 - 名主の家は草や茅葺の母屋があり、土間(台所)や四つか五つの部屋があった。
 - 農民も土壁で家を囲い窓がある台所と、いろりを切った板の間がついた家に住むようになった。
- 部屋の大きさは四畳ぐらいでせいぜい一部屋か二部屋あるだけだった。
- 夜は明かりがなく作業や仕事ができなかったので雨や夜露をしのいで寝るだけだった。



たまがきと祐清

祐清は1962年に2人のお供をしたがえて、新見庄へやってきました。祐清の身の回りの世話は、たまがきという女性が行った。

祐清は農民たちに、米や麦などの年貢を納めるよう強い態度を示しました。豊岡は犠牲になりました。代官の祐清が豊岡を処罰したことが口々に広がると、「安富の時よりもっと酷い」との声があがった。

祐清は、新見庄にやってくるもう一人のお供とともに斬り殺されてしまった。祐清の世話をしていたたまがきはとても悲しんだ。たまがきは悲しみを堪え東寺へ手紙を送った。たまがきの愛情と夢く散った夢への深い悲しみがたまがき書状に込められている。



三村元範

1567年ごろ、新見貞経が落ちのびた後の櫟城の城主となった。

しかし毛利軍の攻撃を受け落城し、元範は城から抜け出した。

岩の影に隠れていた27才の大將、三村元範は毛利軍から逃げているときに毛利方に味方した 追手に見つかり、乱闘の末に最後を遂げた。

櫟城主三村元範公、公戦死之遺跡と刻んだ高さ3mの記念碑を建てた。

三村元範が隠れていた岩の名前は、早乙女岩という。



三村元範が隠れた早乙女岩

感想

私がふるさと学習でわかったことは、服装が職人や農民などの服を変えていたり、同じ服装にしていたりしていたことです。そして、住まいも、農民の住まいが、部屋が増えたり、色々な窓、台所などの場所が増えたり、どんどん進化して行くことも色々な方に教えてもらって、自分たちの故郷のことがよく知れたので本当に良かったです。これからも、教えていただいた事を忘れずに自分たちのふるさとを大切にしていってほしいです。

S.K

祐清の世話をしていたたまがきは、祐清が亡くなってしまって、悲しみを堪えながら書いた手紙を東寺へ送ったことが、たまがきは、祐清のことが本当に好きだったんだなと思いました。祐清のことを「安富の時よりもっと酷い」と言っていたけど、私は、祐清さんの方が優しいし立派な人だなと思いました。

H.K

実際に1日行ってみて早乙女岩、櫟城、たまがきと祐清のことについて詳しく知れました。昔のお粥は今と違って味がとても薄いことがわかりました。他にも、川や、狩りなどでとれたおかずと一緒に食べていることもわかりました。新見庄のことがわかったり、昔の人の「衣・食・住」について調べたりして昔の人のことがさらに知れて良かったです。

N.K

三村元範のことについてまとめてみて歴史や三村元範の最後を知れて良かったです。他にもゆずりは城に三村元範の記念碑が置かれていることを知れたし、たまがきと祐清の関係が知れて良かったです。昔の人のご飯のことを知れました。

N.Y

ふるさと学習B班



衣

鎌倉時代

農民や職人はふつうの半袖で腰まで短い上着に腰みのや、はばきをつけてわらじをはき、仕事をしていました。武家ははかまに、狩衣・水干というのが正装服でした。ですが、ふだんは幅が広い長袖のえりが垂直ぬいつけられた上着をまとい、はかまをはいていました。上着とは直垂といいます。

室町時代

直垂は狩衣・水干にかわって儀礼服になりました。直水の下に着ていた小そでが染色されてふだん着に使われるようになりました。暑い時は、麻布のかたびらで過ごしました。

江戸時代

小そでは江戸時代になると、ゆかた、たんぜん、ねまきなどになりました。武士や農民は働きやすいこと、動きやすいことを、第一に考えた服を着ていたそうです。



中世の武家の服装（左から狩衣、直垂、水干）

食

一般的な食べ物は粥。おかゆとは違い、粟、稗などに、蕨、薇など、あるいは芋や木の実、茸を混ぜて炊いた、水分の多い今の雑炊のような物でした。

中央の武士は、朝、夕の2回が食事でした。新見庄だった頃は塩だけで味を濃くする調味料が無かったのです。貴族社会が贅沢な生活を送っていたことに対し食事を取ることに困っても腹一杯になったフリをして誇り高く楊枝を使う物だと言われ贅沢な生活が嫌われていきました。

新見庄の役人もこのような食生活だったと言われています。新見庄だった頃は、塩を使っていたとなると、早くから海ぞいの人々との交流があったと想像できます。



住

鎌倉時代の一般の農家の家は、小屋ぐらいの大きさに、壁もなく柱に屋根を乗せただけの粗末な物でした。

室町時代になると、農家も土壁で家を囲い、かまどのある台所といろりをきった板の間がついた家に住むようになりました。

部屋の広さは四畳半でせいぜい一部屋2部屋あるだけでした。夜明かりがなく仕事や作業が出来ませんでした。新見庄でも、このような建物に人々が住んでいたと言われます。

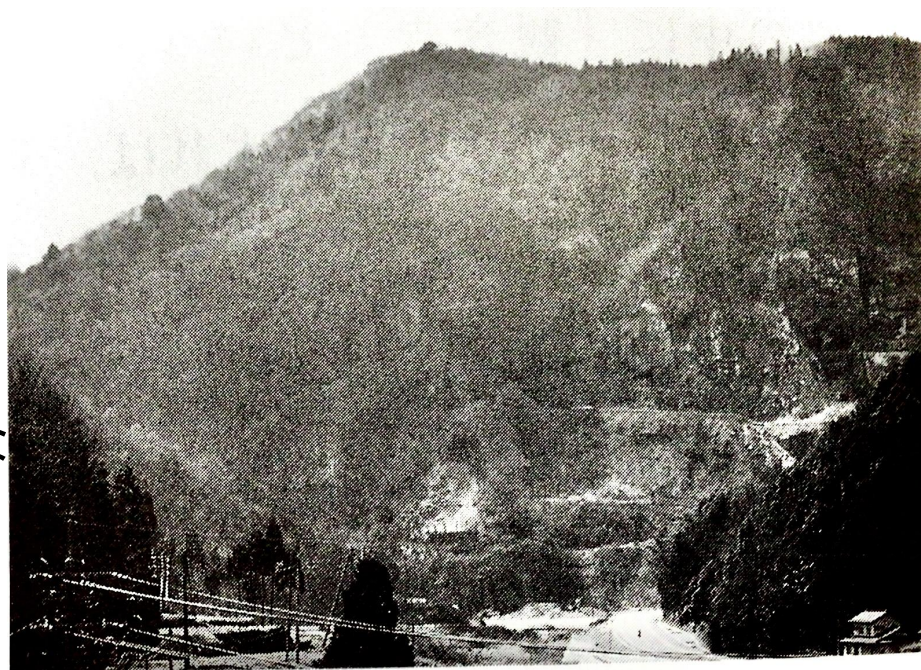


櫟城址

櫟城址は現在の新見市上市に存在していた城で、新見氏が根城とし中心として活用していました。でも、戦国時代になり攻め込まれ、新見氏は新見の地を逃れました。その後櫟城址に入った三村氏も1575年に毛利氏の攻め込まれ負けてしまい、ついに落城してしまいました。

この櫟城址は、城と言っても天守などではなく、頂上に寝泊まりなどをする小屋のみがあったそうです。

櫟城址では敵が攻め入るのを防ぐのも勿論、近くの鉾山の監視の役目も担っていたそうです。

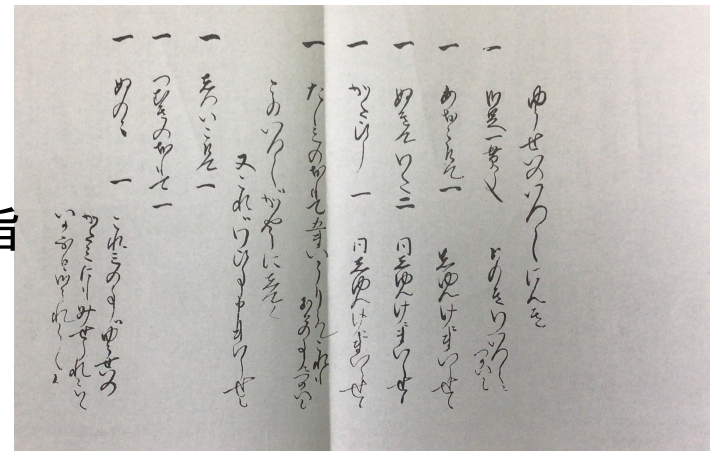
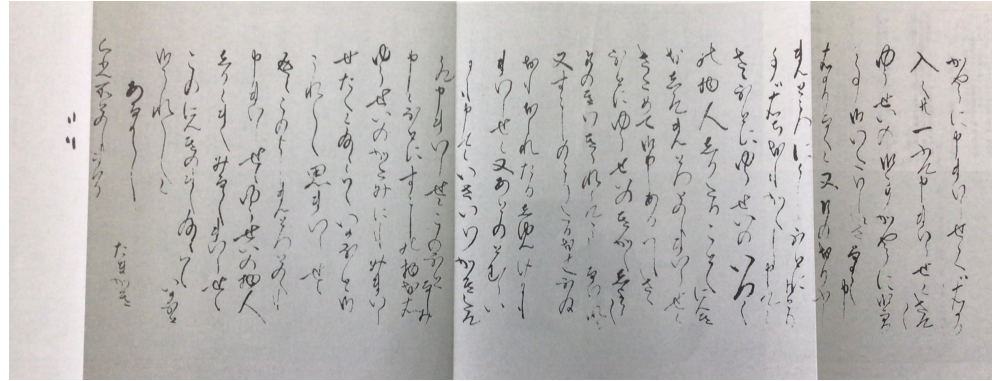


たまがき書状

たまがき書状は、新見の庄領家方の代官として来ていたお坊さんの祐清という人が農民に殺害されてしまい、祐清さんのお世話をしていたたまがきという人が祐清さんの遺した衣類を形見として欲しいという愛情と悲しみが込められた書状です。たまがき書状で書かれていた衣類は、「白小袖」「紬の表」「布子」の三品だそうです。

このたまがき書状は岡山県新見市で唯一国宝に指定されているものです。

この書状は3枚に分けられていて新見美術館でレプリカを見ることができます。



感想

ぼくがおどろいたことは、楨城というのは城があったのではなく畑や、倉庫、小屋があったということです。ぼくは、城があると思っていたけれど質問して城はなかったと聞いた時はおどろきました。4名の方に詳しく教えてもらったので、よく分かりました。

I.Y

私がふるさと学習で分かったことは、新見庄は東寺などと関わりがあり、たまがき書状という書状が国宝に指定されていることです。その他にも知らない新見の歴史を先生方が丁寧に教えてくださりました。

Y.A

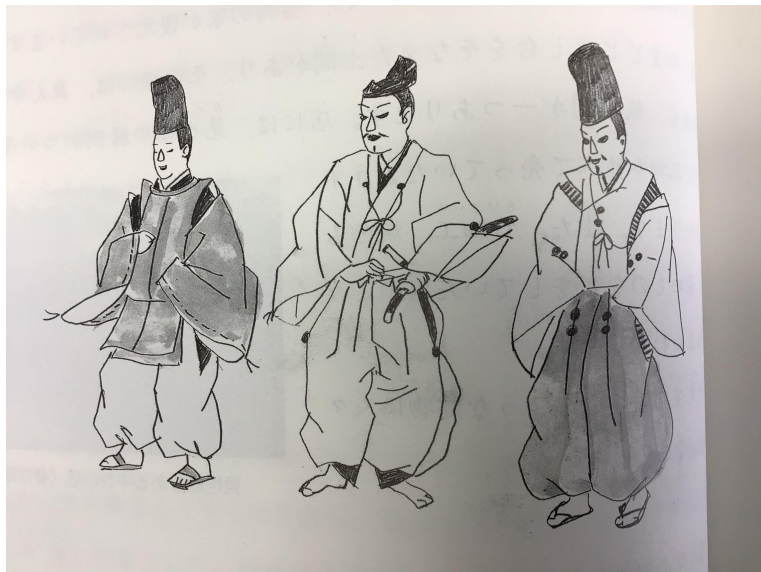
皆さん丁寧に教えてくださり分かりやすく学べる事が出来ました。知らなかったこと、気づいたことなど色々な経験が感じられました。私は天皇陛下が新見に来られたことに驚きました。

S.K

令和5年度 ふるさと学習まとめ

C班

衣



鎌倉時代の武家は、袴に狩衣・水干が正装でした。農民や職人は、普通の半袖の腰までの短い上着でした。室町時代の後半になると直垂は、狩衣・水干に変わって儀礼服になりました。小袖は、上下ひとつづきで身分に応じて綾、絹、紬が用いられていました。江戸時代になると用途に応じて浴衣・丹前・寝巻着などになりました。今と比べるととても貧しいように見えますが、武士や農民は過ごしやすいことを考えた合理的な生活をしていたと考えられます。

食



新見庄で、一般的な農民の食べ物は粥でした。粥は、粟や稗、蕨や薇などの山菜、芋や木の実、茸などを混ぜて炊いて、水分が多く味のうすい雑炊のようなものだったそうです。これに、猪や山鳥、魚などをそえて食べていました。味付けで塩を使っていたことから、早くから海沿いの人々と交流があったと想像できます。

中央の武士は、朝夕の2回の食事が習慣で、主食は玄米(くろごめ)でした。鎌倉時代は、贅沢な生活が嫌われたので、食事も質素なものとなりました。

住



川ぞいや谷あいの低い土地に家を建てて住んでいました。少し離れた、高台の日当たりよい場所が農民の家でした。家は、草や茅葺きの母屋があり、そこには土間のほか四つか五つの部屋がありました。板ぶきの板屋もあり、小屋は壁がなく屋根をのせただけでした。室町時代になると土壁で家を囲っていました。かまどのある台所といろりを切った板の間がついた家にすんでいて、その頃は夜、明かりがなく一部屋か二部屋しかなかったそうです。

櫟城



もともと国道はなく、山道を船で登って櫟城に行っていたそうです。当時はイノシシ、猿はいなかったそうです。櫟城は城というより小屋に近かったそうです。もともと新見氏の根城でしたが、戦国時代に成羽から攻め込んできた三村氏により1567年に新見氏は新見の地を逃れ、そのあと櫟城に入った三村氏も、毛利氏に攻め込まれ1575年に櫟城は落城してしまったそうです。

早乙女岩



三村元範がこの岩に隠れたがバレて早乙女岩の近くで戦いました。その三村元範を見つけた多治部方の追っ手が岩を指で指したことから石指という地名が出来ました。現在も石指の小字が残っています。早乙女岩の上には、「楳城主三村元範公戦死之遺跡」と書かれた3mの記念碑が建てられています。そして早乙女岩は新見市の重要文化財に指定されています。

感想

ふるさと学習でゆずりは城や早乙女岩などの新見の歴史は、とてもすごいと思ったし、たまがき書状が東寺と関係していることを知って新見が好きになりました。ふるさと学習で習ったことを知らない人にこのスライドを通して教えたいと思いました。 T.H

ふるさと学習で四人の方にゆずりは城などの新見の歴史について教えてもらい、新見をもっと知ることができました。東寺と関係しているのがすごいと思ったし、昔と今で全然違っておどろきました。私は食を担当して、粥を食べていたことが分かりました。忘れずに大切にしたいです。 M.A

ふるさと学習をして、たくさんの方々に教えていただき自分の知らない昔の新見を知れたり、普通の人が普段行けないところにも行けたりできたので良かったです。早乙女岩では多治部方の追っ手が岩を指したことによって石指という地名が出来たことにととてもびっくりしました。

S.Y

ふるさと学習をして四人の方に分かりやすく昔の新見のことを教えて貰い、たまがきが祐清と手紙のやりとりをしていた事や樺城に行く時に船を使っていたことなどをたくさん知ることが出来て良かったです。

M.A

令和5年度 ふるさと学習まとめ

D班

國司神社

主祭神として、大国主命、事代主命、小彦名の命、田心姫の命が高尾祭りの時などに、みこし4つに神様がまつられます。主な祭典として4月11日に春祭り、10月11日に例祭、12月11日に新嘗祭などがあります。國司神社の左おくの方にいなり神社があり、それは食料の神様がいます場所です。



楳城

楳城は、戦争のために山をけずり、土地を広げました。また、木を植えて、城を見えないようにしました。木を植えて、20年くらい経ちました。砂鉄で、くわなどを作っていました。イノシシやサルは、いませんでした。実は、楳城は城ではなく、小屋などがありました。



たまがき書状

当時34歳だった祐清が1463年に村人の計画により亡くなりました。そのことを知った当時24歳だったたまがきはとても悲しみました。そこで京都にある東寺に「**祐清が来ていた服をください**」と手紙を何度も送り、やっと祐清が着ていた3つの服をもらうことができました。このたまがきが書いた手紙は国宝にも入っています。昔は手書きの手紙を京都の東寺に送っていて2万5千通のうち新見のことについて書かれているものは2千通もあります。

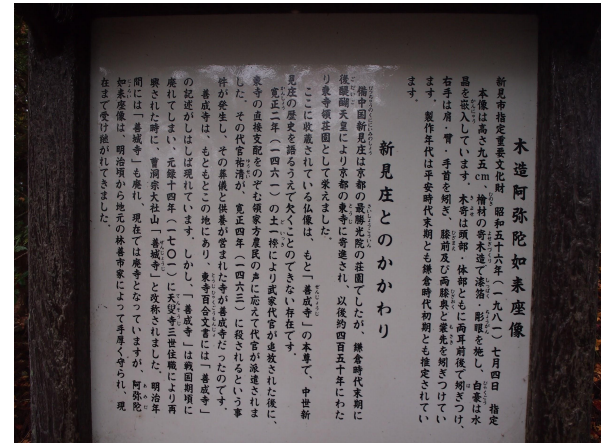
江原八幡宮

この神社は新見市西方にあり、1469年に寺町又三郎が新見庄に攻め込んでくると宣言しました。そこで農民たちが土一揆を起こし阻止しました。その時領家方農民たちは、「東寺のほかに、領主をもたない」と誓い合いました。



善成寺

善成寺は、東寺を総本山とする真言宗のお寺で、1463年に領家方代官祐清が、殺害されたとき、祐清の葬儀、供養が営まれました。平安時代の終わりごろに、善成寺阿弥陀如来座像が作られたとされています。修復されながらも、木に漆がぬられていたため善成寺阿弥陀如来座像はくちてもいません。



感想

櫟城は、木で城を守っていたというのに、とてもおどろきました。ぼくは、ふるさと学習で、櫟城などの歴史のことを、たくさん学ぶことができたのでよかったです。

D.T

國司神社から歩いてご利益があるように、は知っていたけれどみこし1つ1つに違う神様がいるのはとてもびっくりしたし、京都には2500通あったのに、その中の2000通が新見ということがすごいなと思いました。ふるさと学習を通して身近なことについても、くわしく知ることができてよかったです。

K.M

たまがきが東寺に手紙を書くまで祐清の着ていた服が欲しいとお願いしていることに驚き感動しました。たまがきの祐清を思う心に感心しました。そして新見は東寺との関わりが強いということがとてもよくわかりました。

W.R